

続

徒然
つれづれ

新趣味を持つとう

桑野 巍

記者クラブは国会、官邸、各省庁、警察などに置かれている。行政体や経済界にも置かれており、各社の記者はここを取材活動の拠点にしている。記者たちは連日記事を書くことに追われていて多忙を極めるが、半面暇を弄ぶ時もある。「最近の記者さんはメディアが増えているせいか忙しいらしいよ」という元同僚が「われわれの時代は記者クラブは親睦団体と称して他社の記者たちと遊ぶ時間も結構多かった」と昔を懐しんだ。

かつて記者クラブは当局側からの発表資料が多かったことから、記者にとっては原稿を書くネタが豊富で金の鉞脈と揶揄されたり、言論的な“圧力集団”と見られることもあった。しかし、記者たちの表面は穏やかなもので仲良し団体の仲間たちの集団に過ぎなかった。その仲間たちは取材執筆の合間に室内遊技で暇をつぶした。当時流行していたのは花札、麻雀、トランプがご三家で、上品な囲碁、将棋は劣勢だった。私も時折遊技に参加したが、悲しいかなどれもセンスがなく下手くその域を出なかった。臆病者で勝負弱いのだ。

20数年前、将棋の大山康晴名人（1923～1992年）と出会う機会に恵まれ、勝負の世界のお話を伺った時、記者クラブ時代にもっと遊技に熱心でもよかったのではと反省した。名人は自分が勉強したことを力いっぱいやり抜くことを説き、平素から心身の調子を整えておくことの大切さを強調され「じっとこらえる精神力を養え」とおっしゃった。多少無駄と思えることでも労力を惜まない主義を貫き通したという名人の言葉に胸を打たれたのだ。

大山名人は奇しくも私と同県同郡の出身で方言でお話することが出来、より親しみを感じとった。公式タイトル獲得は名人18、王将20、十段14、王位12、棋聖16、五冠王の独占も再三という大山名人だが「ぼくはぼくに忠告してくれる人がいないのが淋しい」とももらしていた。行儀よく将棋をさすことをご自分の特技と心得たというものの、本番の戦いの時、対戦相手がトイレに立った時には必ず対戦者が座っていた座布団のしわを見る癖があるとも話した。卑怯かも知れないが相手がどれくらい疲れているか、を推しはかるというのだろうか。さすが勝負師なのである。

40歳限界説を説えながらも“終生現役”を貫き通し、一局一局を大事にするために自制を繰り返す、という名人だが時間があつたので京都の有名ホテルの喫茶ルームに誘った。そこでいくつかの愚問を呈した。「先生は何手ぐらい先を読むのですか」に対して、名人は「時と場合によるが大体25、26手ぐらい先を」と答えてくれた。一手先も読めない自分を責めても仕方がないが、次なる問いが寸時出せなかった。

「先生、対戦がない時、つまり“放課後”はどのように」と聞くのがやっとなつた。名人は「ぼくは麻雀が大好きで仲間うちで一カ月に32、33日ぐらいやる。深夜になることもあるから、日付が変わり一日が二日の計算」という。将棋が本職だが、囲碁は六段で、これも趣味の一つだそう。将棋の世界でも対局向きの人、指導者向きの人、評論家向きの人と分れるが、名人は「ぼくは若いころから生涯現役型で、対局向きだね」とおっしゃる。

東京へのお帰りの時間が迫っていたので、私が新幹線の簡易時刻表を取り出し「次の京都発は…」と申し出たら、名人は「新幹線の時刻表はほとんど覚えているので」とおっしゃるではないか。失礼なことを申し上げたと後悔しながらJR京都駅へ向かい、名人を見送った。名人は1992年7月に病魔に襲われ69歳で永眠されてしまった。残念というほかない。

スポーツや美術の秋が深まっていくが、趣味を楽しむ季節でもある。お陰様というか世の中は平和だし、ものは豊かだし、休日が多いし、交通の便も悪くはないし「最近のサラリーマンは恵まれている」と古手の人たちは羨ましがる。現役からは「これで個人生活も財源が豊かであれば」という本音も聞こえてくるが、贅沢は聞かないことにする。

私はゴルフが大衆化し始めたころ「ゴルフは亡国の遊び」と主張していたものの「自己責任のスポーツ」と理屈づけクラブを振った。「囲碁は大局を見る目を養う」とも言ったがどちらも中途半端だった。若い行政マンは仕事のほかにセンスある新趣味開発の余裕をもってほしい。

（自治大阪編集委員会顧問）
時事通信社元大阪支社長